

平成18年度「総合研究機構研究プロジェクト研究成果報告書」(若手研究及び基礎研究)

## ホロニック工学の深化

### Deepening Holonic Engineering

プロジェクト代表者：小野五郎 (経済学部教授)

Goro Ono (Professor, Faculty of Economics)

#### 1 研究目的

人類の活動が、その活動基盤たる地球生態系容量を超えてしまったという事実は、人類社会そのものが、現行のままでは近い将来持続性を維持しえなくなることを意味している。換言すれば、これまで人々が依存してきたパラダイムそのものが、もはや信頼するに足りないものとなってきたということである。

そこで、行き詰った既成パラダイムを超越するために、その抱える個別問題を解きほぐし、例えば、過去においては最も科学的思考と理解されていた西洋式の演繹思考の限界を東洋式帰納思考との相互補完によって、あるいは、計画経済/市場経済の如何にかかわらず経済体制が本質的に内包する問題について「市場と政府との相互補完」によって、それぞれ克服する一方、そうした個別対応を超えた人類社会としての全体整合性を保持していくための方策が求められることになる。この一見解決不可能と思われる課題を、本研究代表者(小野五郎)は、「ホロニック工学」として処理することに成功した。

この方法論は、あらゆるシステムについて、柔軟性を十分保持しつつ人為的に制御しようという意味で、これまでのリアル社会だけではなく、これからのネット社会においても有用である。というより、むしろ、後者において、その真の力を発揮することが出来、それが前者に再度フィード・バックされることが期待される場所である。

この期待に応えるためには、「ホロニック工学」を、国内だけではなく海外においても理解・普及することが不可欠となる。逆から言えば、そうした海外への浸透の過程において発生する試行錯誤こそ、本方法論が最終的な完成へと向かうために不可避な作業工程だとも言える。

今回の研究は、以上のような認識の下で、「ホロニック工学」をさらに深化させた上で海外に向けて発信し、試行錯誤を積み重ねていくことを目的として実施したものである。

#### 2 平成18年度成果

当初予定では、新井東大教授など近接領域についての研究に一定の業績を有する研究者との意見交換などを通じて「ホロニック工学」の深化を図った上で、そのエッセンスを英訳して海外への普及を図りつつ、それに対する反応を待って試行錯誤的に「ホロニック工学」のより普遍化を進めていくつもりだった。事実、すでに英訳用の要約は完成しており、送付先名簿整備のための資料収集も始めているところである。

しかし、英訳そのものについては、未だ手付かずとなっており、19年度に持ち越すこととなった。その理由は、昨秋、小野研究室に中国華僑大学から尹教授が研究生として中国政府によって派遣されてきたので、この機会を活用して、ホロニック工学の基盤の一つでもある東洋的発想法を固めることとしたためである。すなわち、当年度は、対中国向け発信を優先することとし、とりあえず中国訳を先行させるということで方針変更を行なった。

すでに英訳用とほぼ同一内容の要約は、中国人院生によつて中国訳が完成しており、それに対する尹教授をはじめとする内外の中国人研究者の反応を見るべく準備を進めているところである。尹教授以外、特に中国在住の研究者に対するアプローチは、協定校である人民大学などを念頭において、同僚である李教授の協力が得られることになっている。

### **3 今後の方針**

平成19年度においては、中国語訳した要約について内外の中国人研究者に発送し、その反応を見る一方で、英訳を進めるとともに、併行して英訳要約を発送する対象の名簿整理に当たる予定である。